

19 多紀家文書（北里医史研所蔵）の概要

小曾戸 洋・町²⁾ 泉寿郎

私共の北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部では平成八年十一月の東京古典会古典籍下見展観大入礼会で「多紀氏医書稿本、元簡・元胤・元堅、一括」と称するダンボール二箱の古書類を落札・入手した。これは添付の資料によると昭和四十三年当時、一誠堂書店に所蔵されていたものらしい。また出所を同じくするもので、別時期、別ルートで北里医史研や小曾戸個人が購入したものもある。これらは多紀家文書と名づけ、従来修理を施し、さらに文科省科研費「江戸のモノづくり」研究の一環として補修・整理を行ってきた。このたびその作業の終了をみたので、概要を報告する。

多紀元簡の著述としてはまず『櫟窓叢抄』『櫟窓類鈔』の草稿類、三四冊がある。歴代の諸書から医学に関連する記事を摘録し類纂したもので、医学制度から、身体・

診断・針灸・薬物・治病・養生・医書・医伝・詩文等、収録範囲は広い。刊行すべく準備が進められたが実現しなかった。他にも伝本はあるが、北里本は浄書版下、元堅筆を含む、数段階の稿本類。武田杏雨書屋所蔵の『奚暇齋隨筆』中にもこれらの僚本（他の元堅の草稿類も含む）に違いないものがいくつもあるから、この多紀家文書は早くから散じていたことが知られる。元簡の著としてはほかに『摭医文類』（元堅筆）、『櫟蔭草堂文稿』（元胤・元堅ら筆）、『櫟蔭草堂文集』、『医贖』（版本に元堅が詳細な補注を加えたもの）、『扁鵲倉公伝棄放』稿本二種（元堅手沢）などがある。

元胤の著述としては『柳汧文稿』（元胤自筆を含む）がある。

元堅の著述、筆写本は多い。『名医彙論』残一七冊、および『同凡例』（自筆）、『同起例』（本活字）の存在は従来知られていなかった。これについては昨年の第五四回日本東洋医学会学術総会で研究発表を行ったので略す。『傷寒論述義』は元堅の代表的著述の一つであるが、これには初稿から最終稿に至る四種の自筆稿本が伝わってお

り、研鑽のあとがうかがえる。『金遺要略述義』も二種の自筆稿本がある。自筆本としてはさらに『註解傷寒論攷異』、『雑病広要互攷』、『聿修堂經驗方目』、『緑満窓雑鈔』、『日鈔』(文化五年、元堅十三歳時の若書)、『掌記』(文政年間、九大医学部図書館に僚本がある)などがあり、手鈔本としては『合禁食』、『半井書目』、手校本としては『扁鵲倉公列伝』などがある。

このほか、天保十三年渋江抽斎の模鈔になる『小児業証直訣序』、また抽斎筆の『広雅疏証・釈器・紬』。軒村寧熙の『水腫方譜』、『疫痢方論』(孤本)。中国古版本を精模した『幼々新書』零本。享和三年、元簡校の『中国歴代医籍志抄』(漢書芸文志・隋書經籍志・旧唐書經籍志・唐書芸文志・宋史芸文志・遂初堂書目・郡齋読書志・直齋書録解題の医書の部の抄出)、元簡手批の『好古堂蔵書画記』。安永三年刊の『躋寿館講次』。そして多紀元胤墓誌銘、元簡・元堅肖像、元佶の筆跡、その他諸紙片を包んだ『雑一包』などもある。

以上、目下北里医史研に保管する多紀家文書は総計、四三種(二〇四冊と一点)である。内容からすると、これ

らは元堅の矢の倉家筋の遺品と察せられる。元堅矢の倉家の蔵書といえば、昭和八年、森潤三郎が『多紀氏の事蹟』を出版するにあたって借覧した多紀崇徳の家蔵書が想起されるが、その引用書目と当方の多紀家文書は全く重複しないし、多紀崇徳蔵書は戦災で消失したというから(多紀英樹氏談)、これら多紀家文書は昭和初期にはすでに多紀家から流出していたものと考えられる。戦前に僚本が古医書蒐集家の購求するところとなっていたし、戦後、近年までその一部と思われる書が古書市場に出現するのもこういう経緯からである。当方保管の多紀家の文書はそのうちでも最もよくまとまったものといえるであろう。

¹⁾(北里研究所東洋医学研究所)

²⁾(二松学舎大学)